

‘confession’ と ‘come out’

— セクシュアリティ論へ向けて —

稲垣 惠 一

1. はじめに

「告白」という語は、一般的に①隠された気持ちや隠している事実を表明すること、②告解を意味する⁽¹⁾。日本語の「告白」に相当する英語は、come out と confession である。ロングマンの英英辞典⁽²⁾に依れば、come out とは、①現われること、②明らかになること、③取り除くこと、④労働するのを拒むこと、⑤自分自身を公に宣言すること、⑥静的な状態や位置において終わること、⑦成功して展開すること、⑧上流社会へと形式的に入っていくということがまれになること、⑨自分自身を開けっぴろげに宣言すること、である。そして、confession とは、①罪や過ちを許す営み、②自らの過ちを司教に話すという宗教的儀式、③信仰の宣言、④信仰の組織体と共有システムを伴った宗教集団、である。

ところで、ここ10年くらいの間には日本においては同性愛者の間に「カミングアウト」という語及び行為が浸透してきた。この意味の「カミングアウト (coming out)」は、ロングマンの英英辞典では⑨である。なぜ confession は、come out にある⑨の意味を持たされなかったのだろうか。これが本稿の課題である。上述の言葉の意味からも分かるように、confession はキリスト教的儀式の意味合いが強いのに対して、come out にはそうした意味は微塵もない。ここに本稿の課題を達成するきっかけがあるように思う。そこで、告白と性の関係について論じたミシェル・フーコーの『知の歴史』にもとづいて「告白・告解 (confession)」が性に対してどのような役割を演じてきたかを概観したい。その上で現代の同性愛者が come out をなぜ行うのかをハートの文化人類学的な視点を踏まえながらスケッチする。そして、最後に come out にある固有の意味を明らかにしよう。

2. ミシェル・フーコーの『知の歴史』

ミシェル・フーコーは『知の歴史』のなかで「近代西洋社会において、個人が自己を〈セクシュアリティ〉⁽³⁾の主体として認識しなければならなかったような〈経験〉が、どのように構成されるに至ったか」(『快樂の活用』p.10)を分析した。フーコーは、性の抑圧仮説について問題とする。性の抑圧仮説とは、セックスは夫婦の間にもみ認められる生殖の手段であり、それ以外のセックスは異常であり、これらを行う者は抑圧されてきた、とする仮説である。フーコーはこの仮説の真偽を問題とするのではない。むしろ、「人間のセクシュアリティについての言説をわれわれにおいて支えている〈権力=知=快樂〉という体制を、その機能と存在理由において決定する」(VS.19)ということ、フーコーは目指す。つまり、フーコーは、生殖に関わる性生活を営む者が権力者となり、それ以外の性生活を営む者を抑圧するという仮説に目を向けるのではなく、人々が性について語るということ、つまり、性の言説化に目を向ける。従って、『知の歴史』の目標は、性について人々を語らせる権力がどのような道筋で人々の中に忍び寄ってくるのかを明らかにすることとなる。

こうした問題構制においては、生殖を伴わない異常性愛は抑圧されているから開放されるべきだと語る人たちが、なぜそう語るのかも問題とされる。フーコーに依れば、彼らは、性の解放を語ることによって未来の自由を先取りして革命と幸福を約束するから、彼らには利益が得られる。ここでは明らかに性の解放を語る人たちは、性について語っている。その限りにおいて、彼らの言論には性の抑圧はない。にもかかわらず、彼らは、性が権力者によって抑圧されているという図式を前提して初めて性について語りうるのである。そこでフーコーは、「そのような〔抑圧の〕仮説を、17世紀以来の近代社会の内部における性に関する言説の全般的生産・管理構造の中に置きなおしてみる」(VS.19)のである。つまり、性の抑圧と解放という2項対立を孕みつつ性の言説を生み出させる権力のメカニズムをフーコーは考察するのである。

ところで、こうした考察において、「告白」とはどのような意味を持っていたのだろうか。フーコーに依れば、17世紀のブルジョワ社会は抑圧の時代の始まり

であり、性について語ることはきわめて困難であった。しかし、その反面、18世紀以来、権力行使の場において性についての言説は増大していたということをフーコーは指摘する。それを引き起こしたのは、トリエント公会議後のカトリック教司教規律と告解・悔悛の秘蹟の変化である。フーコーに依れば、中世の告解手続きにおいては、セックスにおける体位や態度、仕草、愛撫の仕方、エクスタシーの正確な瞬間といったことを細部にわたって司教は信者に告白させた。しかし、トリエント公会議後、こうした行動の細部にわたる直接的な告白を避けるようになった。しかも、カトリックは、プロテスタントの厳格さに対抗するために、以前のような露骨な表現は用いないとしても、肉欲に関する思考、欲望、想像力、悦楽、魂と肉体の結びついた運動等々に至るまで告解させるようになった。こうした告解の手続きは、「欲望に対して特別な効果・作用を生み出そうとしていた」(VS.32)。これは、告白することによって信者の心の中にさらに性的な欲求が渦巻く、ということの意味する。しかし、この告白による性の言説の増幅に人々は「欲望そのものに対する転位や強化や新しい方向づけ」を期待しており、単純に告白が性の抑圧と結びついていたのではない。

さらに、フーコーに依れば、18世紀において性は経済的・政治的問題である人口の問題と絡めて語られるようになる。これは、労働力の確保の問題であり、極めて現実的な問題である。こうして、性は「断罪され、許容されるものとしてではなく、経営・管理すべきもの、有用性のシステムの中に挿入し万人の利益のために調整し最適の条件で機能させるべきもの」(VS.34)として語られるのである。つまり、人間の生命は富や労働力として見なされ、それをコントロールするために性が語られてきたのだ。そのために、性の言説は、人口統計学、生物学、医学、精神病理学、心理学、道徳、教育学、政治批判という形を取った。性は「身体としての生というものへの手がかりであると同時に、種の生というものの手がかり」(VS.184)でもあり、「規律の母型」(VS.184)や「調整の原理」(VS.184)としても用いられる。つまり、ひとは、富や労働力としてふさわしい者であるように個人を規制するために性を用いるし、また、人口を調整するために政治・政策的に性を用いるのである。

フーコーのようにこうした方向で性について考えてみると、「告白」は、個人

(4)

に対して行われることによって、個人を規律すると同時に性の言説を社会の中に増大させる一端を担ってきた。それに平行して、近代資本主義社会を維持するための様々な知が性の言説を増大させた。従って、「告白」は近代資本主義社会における生一権力システム、つまり、人間の生を中心においた権力に加担していったことになる。

3. 同性愛の文化人類学的考察

西欧における「同性愛」の文化人類学的研究に目を向けてみたい。自らもゲイであるギルバート・ハートのゲイ研究をスケッチすることによって、‘come out’を取り巻く状況を明らかにしていこう。

ハートに依れば、ホモセクシュアルが悪であるという発想が近代西欧を支配してきた。こうした発想は、「同性愛研究をタブー視」(H.22)させていたし、フロイトですら同性愛に対して当初はネガティブな考えを持っていたのである。そのようにホモセクシュアルが悪であるという考えが流布した背景には、「過去数世紀にわたる人口問題とセクシュアリティに対する宗教的コントロール」(H.64)や「家族中心の価値観」(H.70)がある。これはフーコーも指摘しているとおりである。こうした状況において同性愛者は倒錯者や過剰性欲者と見なされてきた。ところで、ホモセクシュアリティという概念は、1869年ドイツ人医師カール・ウルリヒスによって創出された。ウルリヒスは同性愛者を同性の異性愛者に魅力を感じる者と考えている。この概念が、西欧を支配してきた先述の発想を背景としているということは論を俟たない。いわゆる、異性愛者である男女は正常と見なされていた。それに対して、ホモセクシュアルは異常且つ不自然なものであり、男性・女性というジェンダーのみによる二元論によって分類できない存在である。ここにまさしく、ホモセクシュアルが疾病と見なされる原因がある。さらに、男性・女性というジェンダーに依る二分法には、同性愛者・異性愛者という二分法も同時に付随する。ハートに依れば、こうした二分法が「文化的イメージネーション」(H.93)にも影響を及ぼしていった。こうして同性愛は処罰の対象となったり、治療されるべきものとなったりした。

ドイツ人医師マグヌス・ヒルシュフェルトは、ホモセクシュアルの基本的人権についての研究を始め、1897年に性解放運動を行う。このお陰で、ホモセクシュアルは処罰の対象ではなくなる寸前のところにまでいったが、ヒルシュフェルトの願いは叶わなかった。しかし、それ以後、様々な知識人がホモセクシュアリティの社会的認知に尽力することによって、上述の男性・女性や同性愛者・異性愛者という二分法に疑問が投げかけられる。第二次世界大戦後、アルフレッド・キンゼイは、アメリカで性の調査を行い、同性との性的接触が考えられていたよりも多いという結果を得た。この結果についてハートは、「キンゼイは、快樂のためのセックスは生殖をしのぐものであること、そしてホモセクシュアリティ／ヘテロセクシュアリティという二分法は現実というよりむしろ文化的理念であることを示した」(H.97) と言う。しかし、第二次世界大戦後、冷戦時代の分極化したイデオロギーのもと、アメリカにおいてはホモセクシュアルが政治的なイデオロギーの問題とされた。そのために、同性愛の調査を行うこともできなかつたし、また、同性愛者は自らのセクシュアリティを隠蔽する結末となった。こうした状況下で社会的に告発された一部の同性愛者は、悲惨な人生を送らざるをえなくなったり、自殺したりした。

しかし、同性愛者とフェミニストが団結することを通じてホモセクシュアルを保護するための団体が1950年代に創設される。また、ホモセクシュアルが政治的に不当に取り扱われるということは、逆にホモセクシュアリティの「正常さ」を科学的に測定するという試みにもつながっていった。この測定の結果、同性愛者は心理学的に「正常」であることが認められた。さらに、冷戦下での同性愛者への抑圧によって、社会の裏でクローゼットに同性愛者はバーやクラブといったコミュニティの場を形成した。この場へ入ることによって同性愛者は、性的少数者としての教育が行われ、新たな生活様式を形成していった。こうしたことから、同性愛者が異性愛者という仮面をかぶって生活するということが理解できる。同性愛者は同性への欲望を社会の表では隠しつつ、裏ではバーやクラブといった場でその欲望を満たす。しかし、こうした状況下で性的な経験や（表であれ裏であれ）社会的な経験を重ねるにつれて、それまでとは異なった意識が芽生え、真実を公表したいという感情が生まれる可能性がある。ここでの真実の公表が、

(6)

‘come out’である。

ハートは、‘come out’とは一種の儀礼であると言う。ハートは、シカゴのゲイによる社会奉仕団体「ホライズン・コミュニティ・サーヴィス」が行っている「カムアウト儀礼」を事例としてあげて、‘come out’を次のように特徴づける。「カムアウト儀礼には、変容を促す力が込められており、その力が若者の新たな発達を後押ししている」(H.203)。ここで言われている変容とは「異性愛者としてのアイデンティティや役割」や「ホモセクシュアリティ」、「ホモフォビア(ホモ嫌い)」から「ゲイとしての社会的存在」、「人生のセックス/ジェンダー領域に関するよりオープンで成熟した能力やプライドを持つ方向」へと変容するということである。そもそもクローゼットな同性愛者は、男性・女性、同性愛者・異性愛者という二分法によって虐げられることによって、コミュニティを作る。その際こうした同性愛者は、異性愛者が同性愛者に対して抱くのと同じ社会通念を信じたままである。ここには、同性愛者の二重の偽りが含まれよう⁽⁴⁾。その意味で、こうしたコミュニティには不健全さが伴う。しかし、カムアウト儀礼を通じて、こうした不健全さから開放されることができるといえる。つまり、カムアウトによって、同性愛者は「同性に向かう欲望を持って生きることについて新たなことを学習し、それを土台として肯定的なセイルム・ジェンダー関係を築き上げる」(H.210)のである。こうして初めて同性愛者は、異性愛者と同様に自らの欲望の行為者となることができる。しかし、欲望の行為者である同性愛者としての自己が何を意味するのかについても明確な答えは見出だされていないし、また、異性愛者が持つような道徳的な主張の同性愛者ヴァージョンといったものを同性愛者が持つわけでもない。それ故、カムアウトという儀礼は何らかの目標へ到達するための儀礼ではなく、「生涯の過程」にすぎない。

4. ‘confession’ と ‘come out’

フーコーの議論から言えることは、キリスト教の‘confession’は近代資本主義社会における生一権力システムを作り上げたもののひとつであるということである。‘confession’は、フーコーが指摘するとおり性現象の言説を増大させたが、

その反面、生殖に関わらない性現象を抑圧する機能も果たした。それに対して、‘come out’ は、抑圧によって社会のクローゼットな場へ追いやられた同性愛者が、自らの欲望の行為者となり、肯定的なセイムジェンダー関係を自覚的に築いていくための儀式である。‘confession’ と ‘come out’ は、同じく自分以外の他者に自分について宣言する儀式である。しかし、前者が図らずも同性愛者を抑圧するのに働きかけたのに対して、後者は意識的に同性愛者を解放するのに働きかけたのであるから、前者と後者は敵対的な関係にあることがわかる。‘come out’ にはもともと同性愛者が自分が同性愛者であるということを家族や友人、同僚に宣言する、という意味はない。また、‘come out’ には ‘confession’ と重なるようなキリスト教的な「告解」の意味もない。アメリカの同性愛者はこのことを意識し、クローゼットな同性愛者のあり方を作り上げた ‘confession’ という語で「同性愛者が、自分が同性愛者であることを家族や友人、同僚に宣言する」という儀式を呼ぶのを敢えて避けて、‘come out’ という語を使用したということわれわれは理解できよう。

ところで、日本でもここ10年来、「カミングアウト」が同性愛者を賑わしている。こうした現象は、西洋の同性愛者の現象に近似している。カムアウトが行われるのは日本の同性愛者もまた社会的な抑圧を感じているからである。ハートは日本の同性愛についても研究しているが、三島由紀夫の作品等の言説から古い時代の同性愛者について研究しているだけである⁽⁵⁾。また、日本にも江戸時代の同性愛行為についての研究もあるが、これらを見る限り、日本においては基本的に同性愛と異性愛が西洋のように二分法で区分されていたというよりも、むしろ、同性愛も容認されていた⁽⁶⁾。だから、それは問題とされなかった。しかし、明治時代以降、西洋文化が日本へ入り込むのと同時に同性愛が問題視されてくる。ここに同性愛者の社会的抑圧が生じてくる。このような状況があるからこそ、アメリカ生まれの ‘come out’ もまた日本に輸入されたし、その意味や価値を失うこともなかった。しかし、日本においては西洋のように同性愛者を取り締まる法律というような強い締め付けがあったわけではない。従って、日本における「カムアウト」は西洋の ‘come out’ よりも緩やかな意味でこの語を解していかなければならない。また「カムアウト」によって得られる、個人に生ずる心的な変化や

文化的な意味づけも西洋の 'come out' におけるのとは若干異なる⁽⁷⁾。これについて明らかになれば、日本においては等閑視されがちな「性」そのものへ各人がどう向き合っていくのか、という問いに積極的に何かを提言しうるであろう。

註

本文中にあるフーコーからの引用は、『知への意志』については“La volonté de la savoir” (Gallimard, 1976) に依り、これを VS と示し、そのページ数をアラビア数字で示す。その他の著作については著作名とページ数アラビア数字で示す。また、本文中にあるギルバート・ハート『同性愛のカルチャー研究』(黒柳俊恭、塩野美奈訳、現代書館、2002年)からの引用は、その書名をHと示し、ページ数をアラビア数字で示す。

- (1) 新村出編『広辞苑』第2版、1969年にある「告白」の項に依る。
- (2) Longman Dictionary of contemporary English, 2nd edition, 1987.
- (3) フーコーがいうセクシュアリティは「性現象」を指し、「性指向性」を表わさない。
- (4) 自分のセクシュアリティを自分に対して偽ると同時に社会に対して偽ることとなる。
- (5) Cf. H.124-128.
- (6) 日比野光敏「日本文化としてのゲイ」(『比較文化研究』19号)参照。日比野氏は、古き日本のゲイ文化を大切にするという方向からクローゼットなゲイの開放を提言する。
- (7) これについては、近年、様々な分野から研究調査されている。そうした分野の結果を待ってから、稿を改めてこれについては議論することにしたい。

(いながき けいいち 哲学専攻)